

フリースクール，放課後等デイサービスを通じての 子ども達とのかかわり，課題

日比正規¹

Masanori Hibi

このたびは広島大学での講演会において、「発達障害の理解と支援」というテーマでお話しする機会を与えていただき感謝いたしております。

しかしながら、大きな会場での講演経験がないこと、あるいは私自身の課題である言葉で伝えることが苦手であることに加え、いつも私を支えてくださっている多くの先生方の前で講演するということで、緊張のあまりうまくお伝えできなかつたと反省しているところです。

それでは、改めて講演を振り返りながら文章に起こしていきたいと思います。

私自身の体験からわかったことは、幼児期・学童期・思春期・青年期というそれぞれの発達段階において、「できないこと」「生きづらいこと」などが様々な行動化、身体化となつて、私が生まれてきた意味を私に教えてきてくれたのではないかということです。

自分が生きて体験してきたことをすべて肯定的に受容することが、自分自身を救うことになるのではないかと気づかされた頃から、このような自分の体験を生かすことができる「居場所づくり」を始めたいと思うようになりました。

それがソーシャルスキルトレーニングを通して、多くの人とのきずなを結ぶことができる「ひびき」のスタートとなつたのです。

対象となる生徒は、コミュニケーションが苦手である、物事への強いこだわりがある、偏りが強い、じっとしているのが苦手といった発達障害やその周辺の子どもたちでした。

最初のうちは、18歳前後のどちらかというと就労前段階の、社会体験・集団体験の少ない生徒が集まり、再体験をすることで、個々の特性やニーズに応じたテーマをもって過ごす場でした。しかし、いつの間にか様々な課題をもつ子どもたちの相談を受けるようになりました。それに対応していくうちに、不登校の子どもたちとかかわるようになり、いつの間にか小学生が毎日数人は通ってくるようになっていました。

元々、いわゆる学校で普通に生活することがしんどい子どもたちの居場所との思いもありましたが、やはり私自身必要としていたソーシャルスキルトレーニングのために、臨床心理士とともに療育とはいかないまでも、それに近い形で子どもたちとラポールを築いていくことができる場づくりもめざしていくことになりました。

また一方では、不登校の子どもたちが義務教育を卒業するにあたり、短期間で環境調整すること

¹ 特定非営利活動法人安芸ソーシャルサポートの会

で社会適応に向けて進める子と、対人関係をまだ二者間でしか築けない子がいるのもわかってきました。そのため、他のフリースクールへ進学することが難しい子と、不登校から引きこもりになっている子たちと一緒にして、基礎的な学習や生活習慣の改善をすすめることができないかと考えました。そこで現在行っているような軽作業を伴ったコミュニケーションの場としての協働体験活動を行うようになったのです。

このようにして様々な課題をもつ子どもたちが活動を共にしていくのですが、それぞれの考え方や物事の見方等の違いを認めること、自分と他人は違って当たり前なのだといったことを、小集団での活動を通して子どもたち自身が理解していったほしいと願っていました。子どもたちが自分の成長を実感し、本当の意味での自分の夢や将来像を見つけるお手伝いをするのがサポートの柱に少しずつなってきたのです。

しかし相談に来られた方の中には、月謝制では無理と二の足を踏まれる保護者もいました。ここ10年来拡大した経済的な格差の実態に直面したのです。そこで、今行っている活動の内容を明確にして、福祉制度に踏み込んで私たちの目的を果たそうとしてNPOを設立しました。

私たちがサポートしている様子は講演の中で述べたとおり、個々の子どもたちのニーズを探りながら、トータルな表現や意思表示ができたり、対人関係の構築など目には見えにくいメジャーの目盛を作っていたり、関係性を作りながら本当になりたい自分を見つげたりすることなどの支援を一番の目標として活動しています。その体験を積み重ねる場から「快よりも甲斐」を作り出すことができるようにしていきたいものだと考えています。

フリースクールの運営や活動も徐々に認められてきました。WISCなどエビデンスに基づいた成長を促したり、しっかりと抱えながら支援したりするような取り組みは、学校への出席が認定されるようになるなど、それなりの成果が表れるようになってきました。

昨年10月17日に新聞などで報道されたように、フリースクールがようやく「多様な学びの場」として公的な支援対象となる動きがありました。今後、法的な整備が進む中で、専門職としての位置づけが期待されることと、いろいろな発達障害の子どもたちへの多様な取り組みや、形にとられない運営の裁量権、事務量の負担軽減を望みたいものです。

もう一つの福祉サービス事業として、放課後等デイサービスを運営していますが、その取り組みをとおして、今現在強く思うことがあります。

放課後等デイサービスは、元々は預かり（レスパイト）を中心に、保護者の養育負担軽減や就労保障と学童保育の施設として設けられた制度であり、私たちが取り組んでいる発達支援やソーシャルスキルトレーニングなどは指針としては示されているものの、一般的には幅広い解釈の一つとされているのです。

たとえば、複数事業所利用の場合、事業所間の横のつながりががないため、一人の子に対して関連のない個別支援計画書がそれぞれの事業所で作成されるケースが急増しています。さらにこの福祉サービスに異業種からの一斉参入により、アセスメントが運営されている事業所によって大きく違ってきているという実態が見えてきました。

教育的な学力指導を優先している事業所、体づくりやそれに伴うルール関係づくりを目的にして

いる事業所、学校で目いっぱいがんばってきた子どもたちに放課後こそ自由に過ごすことを大切にしている事業所など多種多様とっていい実態です。このような複数の事業所を利用することにより、それぞれの特徴を生かすこともできれば、それぞれの事業所から異なった課題や問題点を指摘されることもあり、子どもにとって本当にこれでよいのかと思ってしまう現状もあるのです。

また、対象となる利用者の発達段階が、就学前～小学校～中学校～高等学校とステージが上がるにつれて利用可能となる事業所が少なくなる実態があるのも事実です。特に小学校5年生頃からの前期思春期以降に見られる、傷つき体験やモチベーションの低下などの課題に心理的療育を通して対応することができる事業所は格段に少なくなっていると言わざるを得ません。

昨年4月からは高齢者福祉サービスと同様にケアマネジメントシステムが導入され、相談支援事業所の相談支援専門員の力量が問われるようになってきています。発達障害を専門としている相談支援専門員の絶対数が不足しているのにもかかわらず、一部ライセンスの緩和条件はあるものの、福祉サービス実働経験5年以上が必要とされているため問題を複雑にしているようにも思えます。

また、福祉サービスにかかわっている多くの専門職の人たちが今以上に評価されるとともに、所得も改善されていかなければ質の低下はまぬかれないと思います。現在、私たちがNPOとして行っている公益活動に、心理職・教育職を目指しながら参加してくれている大学生や大学院生に、就職先として私たちが選択されなくなるような不安を覚えてしまいます。しかし、子どもたちの成長を見守り支援していく仕事は、実にやりがいがあり魅力であるといえます。

一般社団法人日本医療福祉教育コミュニケーション協会理事長の河野政樹先生は、「コミュニケーションの振興で私たちの未来を変えよう」と題された文章の中で次のように述べられています。

「人と人のコミュニケーション能力は、道具の進化とは裏腹に、どんどん退化してきているのではないだろうか。医療、福祉、教育の世界で働く人たちは、その中でコミュニケーションを求められる。それは、バーチャルでもなく、偽名を名乗ることもできず、ただただ、コミュニケーションに疎くなった人たちとコミュニケーションしていかなければならぬ矛盾に晒され、疲れ切り、現場から離れていく人が急増している。今こそ、コミュニケーションの再興を図りたい。」

まさにその通りで、だからこそ支援する立場の方々が様々な分野を乗り越えてつながっていかなければならないと強く思うのです。

日常の活動を振り返ってみると、福祉制度の活用を証明するための書類作成に追われ、本来向き合わなければならない子どもたち、保護者の皆様のための時間を作ることが難しくなっています。医療・福祉・教育機関との交流の場が必要であることも痛感しています。

このような現状から、それぞれの立場を理解し、同じ方向性をもってより一層コミュニケーションの力を高めて、発達障害への理解やいろいろな課題のケース会議等を通じた「学び」を共有できる地域活動をしていきたいと夢見ています。

将来、子どもたちが、自立した生活を送ることができるように、多くの職場や企業と公的機関、私たち福祉サービス事業所との連携を深めていくことができる地域社会になることを希望してやみません。